

小川 輝夫氏 追悼 文法研究から表現研究へ

田中 瑩一

小川輝夫氏は島根大学教育学部第一期（1953 年）のご卒業だった。私は 1952 年第四期生として入学したが入学数日後に小川氏の名前を記憶に止めるできごとがあった。新入生のオリエンテーションを担当された国文学の教授が「国語学のことは小川に聞いてくれ」と言って指導を切り上げられたのである。その年の冬、研究室の卒業論文発表会があるという掲示が張り出された。小川氏の論文は「形容動詞否定論」と題されていた。この題名は衝撃的だった。受験勉強の尻尾を引きずっていた私にとって教科書の枠組みが否定されることなど思いもよらないことだった。「これが研究ということなのか」とさわやかな興奮を覚えた記憶がある。時枝誠記博士の『日本文法口語編』の出版（1950 年）もあって、当時文法論議が盛んであったことはのちに私が知ったことである。後年小川氏は真下三郎先生を追悼する文章の中で真下先生から「時枝君への、君の疑念、存命中に言っておいたんだがね」と声をかけられたことがあったと述べておられる（『表現研究』第 86 号）。

小川氏の主要な研究は平安仮名文の文法をめぐってすすめられた。中でも「紫式部日記」の記述に見られる「侍り」の用法についての表現論的検討（『広島文教女子大学紀要』及び『北九州大学文学部紀要』1984~91 年連載）は精細をきわめ、作品の読みを深める貴重な視座を提供するものであった。また『表現学大系』第 6 巻（1988 年刊）に寄せられた「今昔物語集の表現」もそれまでの「今昔物語集」の文章研究史を総括したうえで類話との表現比較や和文脈との関係に光を当て、当時未開拓の分野に切り込まれた先駆的なものであった。

小川氏は晩年、俳句雑誌「天穹」に文法講座を連載しておられた。ご自身の研究成果を一般にかえすことを意図された、研究者としての良心に立つお仕事であったが、思い半ばに逝かれたのではなかったか。心からご冥福をお祈り申し上げます。

【略歴】

生年月日 昭和 5(1930)年 4 月 16 日

学 歴 島根大学教育学部(昭和 28(1953)年 3 月卒)

職 歴 島根県立高校教諭、広島文教女子大学を経て、北九州大学教授にて定年。

【研究業績目録】(抄)

【著書】

(共著)表現学大系 各論篇 第 6 巻 軍記と説話の表現 教育出版センター 1988

【論文】

接続副詞の機能 『島大国文』4 号 1975

否定表現の原理 『文教国文学』14 号 1984

否定誘導表現—陳述副詞の機能再考— 『文教国文学』15 号 1984

「紫式部日記」の記述 -- その日記的部分の「侍り文」の表現形式について—
『広島文教女子大学紀要』19 号 1984

紫式部日記の「消息文的部分」の方法—その構成と「侍り」—
『広島文教女子大学紀要』20 号 1985

「侍り」の語性 -- 紫式部日記消息文的部分—
『広島文教女子大学紀要(人文・社会科学編)』21 号 1986

紫式部日記「三才女批判」の文章—「侍り」の現れ方をめぐって—
『広島文教女子大学紀要(人文・社会科学編)』22 号 1987

紫式部日記消息文的部分の「侍り」—その自己省察の段—
『広島文教女子大学紀要(人文・社会科学編)』23 号 1988

紫式部日記消息文的部分の「侍り」—その「自照」の章段について—
『広島文教女子大学紀要(人文・社会科学編)』25 号 1990

紫式部日記の会話文—その「侍り」について—
『北九州大学文学部紀要』45 号 1991

和泉式部日記の歌の解釈試論(1)—『や…らむ』構造について—
『北九州大学文学部紀要』48 号 1993

和泉式部日記の歌の解釈試論(2)—「しづ心なく花の散るらむ」の解釈とともに—
『北九州大学文学部紀要』49 号 1994